

リンゴ果実に袋を掛けないで栽培した「ふじ」は「サンふじ」と呼ばれ、日光をたっぷりと浴びて育つため食味が良く、消費者に好評だ。この無袋栽培は、着色管理や病害

未来を開く

青森産技センター報告

—39

虫防除技術の発達により可能となり、平成に入ってから県内で広く普及している。ところが無袋栽培では、ふじの負の特性である「つる割

植物ホルモン農薬散布

れ」といわれる裂果が発生しやすい。園地によってばらつきはあるが、例年で1割程度、多い年では3割以上発生する。リンゴ農家から、高品質のサンふじを安定生産するための対策を求める声が上がっていた。

基本的な対策としては、土壌の排水性改善や剪定、減肥による樹勢抑制などが挙げられるが、即効性は期待できない。

い。りんご研究所は2005年から、省力的で効果的な薬剤散布によるつる割れ低減技術の開発に取り組んだ。

当時、世界的にみてもリンゴの裂果に関する研究は限定的で、低減技術につながるような先行研究はほとんど見当

省力的技術で発生半減

たらず、手探り状態だった。そんな中、研究員の一人から別の目的である薬剤を散布したところ、つる割れが減少したとの報告があった。これが、植物ホルモンを有効成分とする「ヒオモン水溶剤」だった。同水溶剤はもとも収穫前、落果を防止するために使われていた。

実際に確認試験を継続したところ、その効果は確かなもの

のと判明。その後、散布適期の把握、適用性試験などを経て、10年につる割れ低減を目的としてヒオモン水溶剤の農薬登録が拡大された。県内の各普及指導機関による大規模試験の結果、つる割れの発生を半減させる効果が確認され、その技術が普及した。

これはサンふじの高品質安定生産にとって画期的な技術で15年現在、使用実績は県内

全体のサンふじの栽培面積7千畝のうち1割超に当たる約750畝に上る。

県産リンゴの品質は国内のみならず、海外でも高く評価されている。当研究所はリンゴに特化した国内唯一の研究機関として、これからもその信頼を支え、リンゴ産業の発展に貢献していきたい。

つる割れした「サンふじ」



智)

(りんご研究所栽培部 葛西

リンゴのつる割れ防止